

知覚的知識に関するセラーズ主義者らの諸見解を比較・考察する

松本将平 (Shohei Matsumoto)

東京大学人文社会系研究科

ウィルフリド・セラーズが「経験論と心の哲学」(以下、EPM と略記)の中で展開した知覚的知識に関する認識論的立場は、ロバート・ブランダム、ジョン・マクダウェル、マイケル・ウィリアムスを始め、多くの論者に多大な影響を与えた。彼が EPM において行う認識論的議論は、「知識とは何か」という問いに答えるというよりもむしろ、知覚者のなす「報告」に焦点を当て、「その報告が知識の表現であるのはいつか」という問いに答えるものである。彼の見解は簡単にまとめると次のとおりである。ある主体 S に ϕ であるようなある対象が現前しているとする。このとき、 S の「これは ϕ である」という報告が知覚的知識の表現であるのは次の条件がすべて満たされているときまたそのときに限る:

- (i) その報告が S の、〈その対象が標準的条件において見られているときそのときに限り「これは ϕ である」の顕在的ないし潜在的なトークンを生み出す〉という傾向性の表出である
- (ii) その傾向性は S によって獲得された因果的性質である
- (iii) その報告が「権威」を持っている (「第一のハードル」)
- (iv) S が、自らの報告が権威を持っていることをある意味で知っている。(「第二のハードル」)

このセラーズの見解は、特に(i)の条件に見られるように、後年になってアルヴィン・ゴールドマン(1979)によって広く知られるところとなった信頼性主義の洞察を含みながらも、一方で(iv)という内在主義的要素も併せ持つという特徴を持っている。しかし、一方で(iv)は彼の立場を「悪名高い強い内在主義」(Rosenberg 2007, p. 248, 強調原著者)とするものであり、これまでに多くの批判にさらされてきた (Alston 1989, Brandom 1997 など)。

セラーズの課す条件(iv)は、そのままでは確かに強すぎるかもしくは認識論的に問題がある。一方で、彼のアイデアにはやはり見るべきところがあると思われる。そこで、セラーズの後継者たちは、様々な仕方で彼の見解が抱える問題を回避しながらも彼のアイデアを引き継ごうとしてきた。例えば、ブランダムは外在主義を、マクダウェルは選言説を、ウィリアムスは文脈主義を取りながら、セラーズの路線を引き継ごうとしている。また一方で、ウィレム・ドフリース(2005)やジェイ・ローゼンバーグ(2007)のように、セラーズ自身の内在主義的見解を守ろうとするものもいる。

本発表では、セラーズが EPM において認識論を「報告」と「権威」をキーワードに展開した点に注目し、セラーズが問題含みの第二のハードルを課した理由を考察したい。その

上で、セラーズを引き継ぐ諸立場のうちいずれのものが、セラーズの洞察を最も良く生かしかつ認識論的に問題のない立場であるのかを探求したい。

Alston, W. P. (1989). What's wrong with immediate knowledge?, in *Epistemic justification*, 52-78. Ithaca, NY: Cornell University Press.

Brandom, R. (1997). Study guide, in *Wilfrid Sellars, Empiricism and the philosophy of mind, with an introduction by Richard Rorty and a study guide by Robert Brandom*, Harvard University Press. (References are to the section numbers in the text.)

deVries, W. A. (2005). *Wilfrid Sellars*, McGill-Queen's University Press.

Goldman, A. I. (1979). What is justified belief?, *Justification and knowledge*, 1-23, Springer.

McDowell, J. (1998). Having the world in view: Sellars, Kant, and intentionality, *The Journal of Philosophy*, Vol. XCV, No. 9.

Rosenberg, J. F. (2004). Sellarsian seeing: In search of perceptual authority, *Perception and reality*, Ralph Schumacher (ed.), Mentis Verlag, Reprinted in Rosenberg (2007) *Wilfrid Sellars: Fusing the Images*, Oxford University Press. (References are to the reprinted edition.)

Sellars, W. (1956). [EPM], *Empiricism and the philosophy of mind*, in Feigl and Scriven eds., *Minnesota studies in the philosophy of science*, vol. 1, University of Minnesota Press.

Williams, M. (2009). The tortoise and the serpent: Sellars on the structure of empirical knowledge, in Willem A. deVries (ed.) (2009), *Empiricism, Perceptual Knowledge, Normativity, and Realism: Essays on Wilfrid Sellars*. Oxford University Press